

選考をふりかえって

「読書体験記部門」 中学生の部 選考長 中西 進

「真の美」は吉田桃子の『ラブリイ!』を読んでの体験記である。ラブリイな存在が、とかく見た目のよさに生じることの内容を、読書によって探求した文章、と行ってよいだろう。

こう書いただけでも、見た目のよさが「真の美」かと尋ねる文章だろうと、予測がつく。そのとおりの論述ながら、これを一筋縄ではいかない人間の課題として、粘り強く追い求めるこの体験記は、なかなか堅実であり、見た目のよくない人の心理にも、十分手が届いていて、良質な体験記となっている。

これにつぐ優秀作二編も、さほど遜色はない。

「夏の庭」は一人の老人の死を軸として少年たちが少しずつ死を了解し、老人が戦争という死と隣り合わせの状況に生きた過去をもつことも、生命観を交し合うことになる。老人は一旦元気になるが、夏の終りに死ぬ。筆者たち少年自身が登場人物であるかの如き筆の運びが、快かった。

もう一つ「吃音でなく、言葉聞いて」はみずからも吃音者という立場にたち、安易な同情や通り一べんの助言が、いずれも心を傷つけることを、告発する。そして自身が勇氣をもって色々に挑戦していくことを思い立つプロセスが、素直に描かれていて、まさに一つの「体験」の把握に到ったことが、すばらしかった。

概して中学生における読書とは何かを考える上で、今回の優秀作は、いずれも書物を自分の対話者としていることが喜ばしかった。むしろ、作中にまで入りこんで、伴走してみたり、登場人物ふうに科白をいってみたいするのもいい。

なにしろ中学生諸君の抱えている問題は、人生の大きな課題でありすぎる。書物を読み十分に思考することは、必須の作業だと、今回も思った。